へそのない本

北杜夫

新潮文庫

へそのない本

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草131 O

昭和五十一年五月二十日印刷
昭和五十一年五月三十日発行

著者 北杜夫

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一一一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替東京四―八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

㊗ 印刷・株式会社光邦 製本・憲専堂製本株式会社
© Morio Kita 1976 Printed in Japan

新潮文庫

へそのない本

北杜夫著

新潮社版

2328

目次

1

小さな空色の花……一〇

さまざまな青葉わか葉……一五

月見草のことなど……二〇

霧とサルオガセ……二五

高山に咲く花々……二七

2

どくとるマンボウ氷海をゆく……三四

トビウオ休みのある島……九六

果物の島の思い出……一〇六

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ひもじい頃の思い出……一二五
嫉妬……一二九
3
女性ばんざい……一三二
食べるが勝……一三六
食卓の風景……一三〇
天下の美味……一三四
女の執念……一三八
怖ろしい女……一四二
悪口について……一四六
赤ん坊と女……一五〇

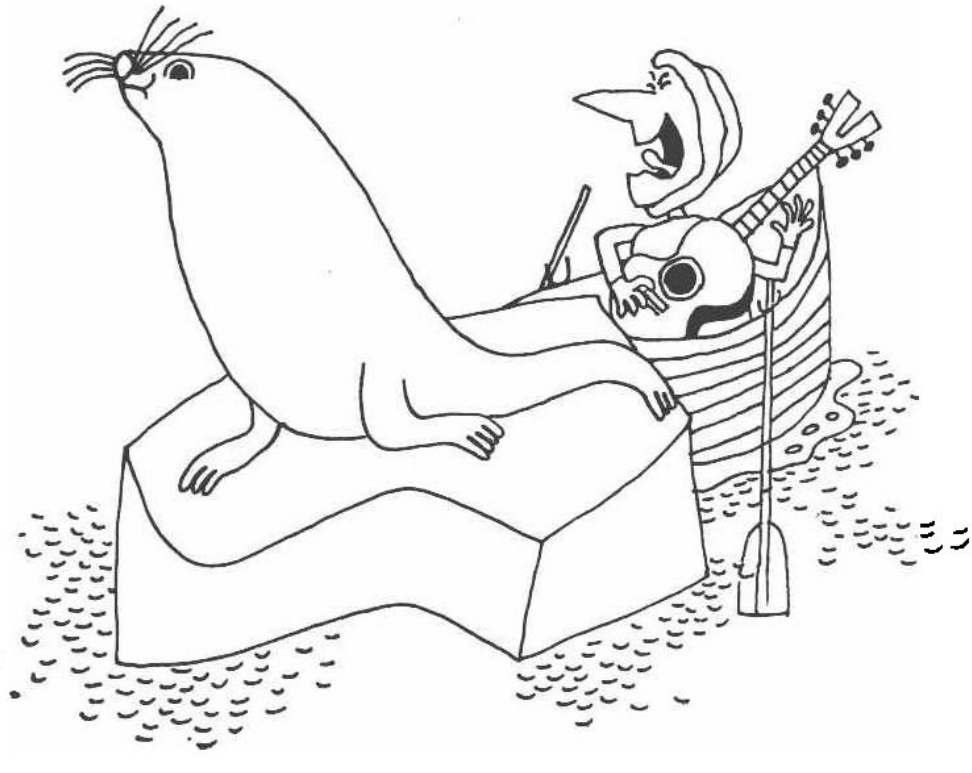
宵……一五六
童女……一六〇
うつろの中……一七〇
百蛾譜……一七五
港にぎらつく日が……一八二
推奨株……一九七
月世界征服……二〇一
処女……二〇五
贅沢……二三六
意地悪爺さん……二四四

解説　小林信彦

カット　佐々木侃司

植物の絵　山本忠敬

へそのない本



1

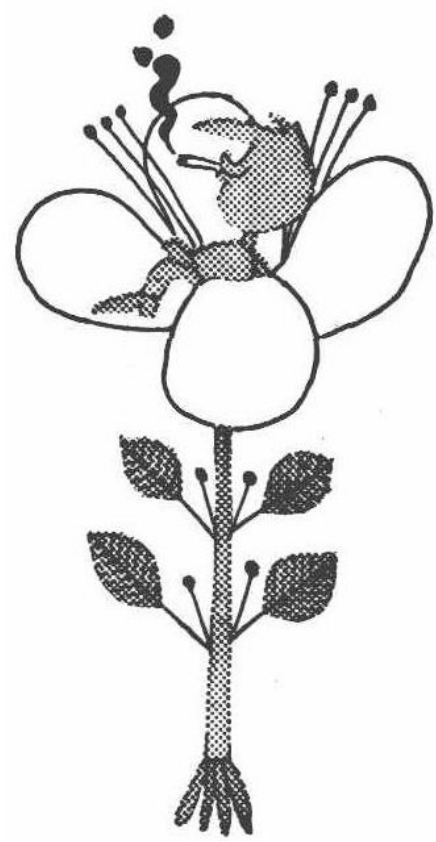
此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

小さな空色の花

花と私という組合わせはもとより柄にあわないのである。第一に私はそれほど優しくない。第二に私は博物学には興味をもつが、観賞用の植物についてはおそろしく無知である。花屋の店頭に立つと、季節に応じてさまざまの花が飾られている。それなりに美しいと思うが、それは自然を無理に歪(ゆが)めたような彩りで、心底から好きにはなれない。その私が花の話を始めるのだから、どういう不粋な花談義になるか、保証の限りでない。

欧州の街で、街頭の花売りの姿には心を惹(ひ)かれた。多くはお婆さんで、このうえなく肥満していて、善良そうなのもいれば意地わるそうなのもいる。チューリップなどの原色の花々がセロファン紙につつまれて並べられている。それが北ヨーロッパの冬の陰鬱な街にこよない彩りを与えている。実際、あちらの人たちは何かにつけ花を贈られ贈るようだ。家へ招ばれると、ちょっとした花を持参するのが習慣になっている。花にもいろいろな意味合いがある。うっかり赤い花を持っていったりすると愛情の表現ということになる。

花うらないなども大衆の中にしみこんでいる。若い、まだ痩(や)せた少女が、花びらをむしって占



いをやっているさまは、想像しただけでもわるくない。
「あの人は私を愛するだろうか？」
一枚の花弁をむしる。
「ほんの少し？」
もう一枚むしる。
「それとも情熱的に？」
三枚目の花びらがむしられる。
「それとも全然愛してない？」
こうして初めに戻って、最後の花びらが運命を決する。うまい具合にいいところに当れば少女はうっすらと微笑するだろう。
「全然！」なんてところに当れば彼女はくちびるを噛(か)むだろう。
このドイツ語で「全(カル)然(ニヒト)！」という発音にはかなり激しい響きと感情がこめられているもので、聞いただけで胸がいたむ。そんな花びらをひきあてた少女のそばに、私はいたくないと思う。
といって、花を贈る習慣はなかなかいいものだと思うが、そういう花屋に売っている花に対して、私はほとんど興味を抱かない。
先だって、外国から帰ってきた人の家へ招ばれた折、私は柄になく花を持ってゆく気になった。お菓子やお酒より先方も花に慣れているだろうと思ったのである。しかし、花屋へはいってみると、いろんな花があるけれど、その名前さえ私にはわからない。なるたけ見た目によくてなるた

け安いのを、と私は考えたのだが、それがどれであるかがわからない。
うろうろしていると、店員が寄ってきて、
「カーネーションはいかがです。今日は母の日ですから」
なるほどなるほど、と私は思った。しかし先方の夫人に赤いのを贈って愛情の表現であると思われては困るから、
「白いのを。白」
と、私は言った。
白いカーネーションを持って私はそのお宅を訪れたのだが、白いのは亡くなった母親の場合ですと教えられて、私は恥をかいた。そんなことさえ私は知らなかったのである。

それゆえ、私はここでは野の草花、わざわざ庭園などに栽培されたりすることもないひっそりとした野草について記したいと思う。
春咲く花は沢山あるが、もっともつつましく、そのゆえにもっとも象徴的ともいえるのがイヌノフグリである。
この名前はあまりよくない。狗(いぬ)のふぐりとは、その果実が似ているからだそうだ。しかし、その名に反してこの花はかぎりなく可憐である。
イヌノフグリ、オオイヌノフグリ、タチイヌノフグリなどの種類があるが、一番普通に見られるのはオオイヌノフグリである。

私がこの草をはじめて知ったのは、太平洋戦争も末期に近づいて、空襲にあけくれした時期であった。私は中学生で、昆虫に興味をもち、将来は昆虫学者になるつもりでいた。

しかし昆虫採集どころの騒ぎではなかった。毎日、私はゲートルを巻き、弁当をカバンに入れて家を出たが、それは学校へゆくためではなく、動員されていた工場へ行くためであった。そこで私たちは鉄棒を運び、トラックで砂を運び、あるいは旋盤にむかって爆弾投下器の部品をつくった。すべてのものが金属と油の匂いがした。

そういう日常であるだけに、自然界へのあこがれ、戦争とは関係なく営まれている虫たちの生活に対する興味はかえって助長されたともいえる。しかし冬であった。自然も何もかも冬で、寒く固く、すべてのものがかたく凍りついていた。

それでも季節だけはやはりめぐってきた。日ざしがいつとなくぬくもって、ときどき小さな虻が空中に浮かんでおり、そればかりかモンシロチョウが工場の中までとんでくる日もあった。そのような一日、私は工場の横手の道のへりに、緑色の雑草が芽ばえてきた中に、ごく小さな空色の花弁を見出したのだ。ほんの小さな藍色の花、なにか特殊な事情でもなければ見のがしてしまうような微細な花である。それがオオイヌノフグリであった。

終戦後、信州の松本高等学校へはいってからも、この花と私はずっとなじみであった。信州の冬は寒い。おまけに食糧難のため、その寒気は骨にまでしみとおった。私たち

は南松本の駅のそばの、工場の寮を借りて暮していた。そこから学校までは歩いて半里ではきかないが、汽車の便がわるいので、私たちは大半畠の中の道を歩いて通った。冬にはどこもかしこも凍りついている。雪は少ないが、いったん降るとなかなか消えない。遙かにつらなるアルプスから吹きおろしてくる烈風が肌を刺す。

しかし、ようやくに空が春めいてくると、小川の土手につもっていた雪がばさりと水中に落ちこむ音が聞えるようになる。きびしく連なっているアルプス連峰はうっすらと霞んで見える。まだ春とはいえないが、春はもうすぐそこまでやってきているのだ。

特に日ざしが暖かく、マントもぬいでしまいたいような一日、私は小川のへりでオオイヌノフグリを見つけた。東京で見たのと同様あまりにつつましく、それだけ可憐に、すでに藍色の花弁をつけていた。気をつけて探すと、畠のへり、道のわきなどにいくらも見つかった。小さな虻が訪れているのを見たこともあった。きびしい冬をへてきた目には、それがどんなほかの春の使者よりも、いきいきと懐かしく映じたものである。

オオイヌノフグリは、東京地方では二月末からもう花をつけている。欧州の原産で、明治の初めころ渡来したものというが、今では日本の至るところでその姿に接することができる。

彼女は低く地面に這っている。卵円形の小さな葉がびっしりついているが、関心のない者にはくだらぬ野草がはびこっているとしか思えない。しかし春早く、ごく可憐な藍色の小花をその草むらの中に見出すとき、誰だってその名前を知りたいと思うだろう。

オオイヌノフグリ……それにしても、この名は彼女にはどうしてもふさわしくない。

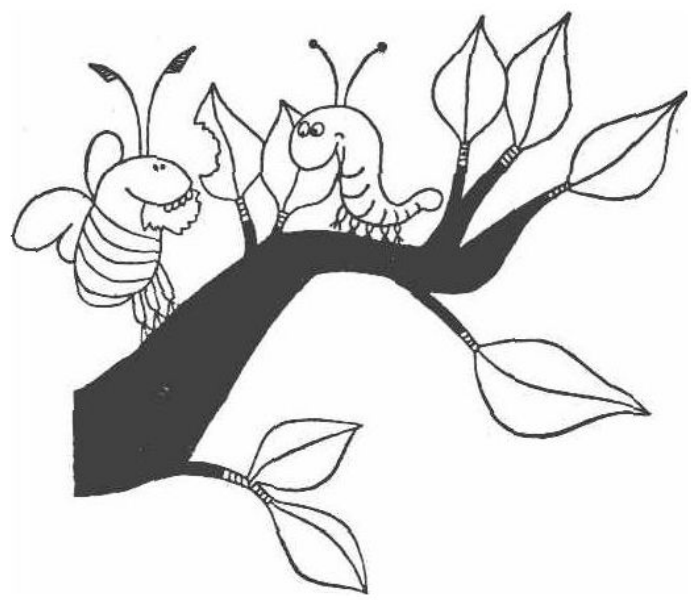
さまざまな青葉わか葉

初夏の候になってもっとも目を惹くのは花よりもむしろ木々の若葉である。普通人々が庭に植えて尊ぶ樹よりも、雑木林の新緑がいい。寒い陰気な冬をおくる地方ほど、心理的にもその色は鮮やかだ。

落葉松（からまつ）の新芽を御存知だろうか。ごく小さな丸い玉芽がつきはじめる。信州では、冬、ぼしゃぼしゃとすくんでいた裸の落葉松の梢（こずえ）が、いつとはなしに緑っぽくなってくる。この玉芽がひらいて柔かな針葉となるころには、郭公の声が谷から谷へこだまするようになる。

漢字で落葉松とかくのは、故牧野富太郎博士によれば誤用だそうだ。しかし氏の労作『日本植物図鑑』をひもとくと、われわれになじみの多くの植物名が「誤用」とか「……と書くは非なり」となっていることすこぶるおびただしい。やはりこのくらいの大学者となると、相当意固地な精神の所有者であったようだ。試みに近くの松の類いをよんでみられよ。

「クロマツ。漢名、黒松（誤用）。ゴエフマツ。漢名、五鬚松、五叉松（共ニ誤用）。アカマツ。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com